▲NEWS交差点▼

深刻 プラごみ汚染

途上国含め地球規模

レジ袋やペットボトルなど使い捨てプラスチックごみによる海洋汚染に注目が集まっている。状況は先進国だけでなく、中国やインドなどの新興国や発展途上国を含めて地球規模で深刻化。国際的な取り組みの強化を求める声が高まりつつある。

経済協力開発機構（OECD）や国連環境計画（UNEP）によると2015年の世界のプラスチックごみ発生量は3億トンを超えた。1980年代の約5千万トンから6倍に増加しており、これは今後さらに増えると予測されている。

プラごみのほぼ半分が使い捨ての包装容器で、中国の発生量が4千万トン超と最も多い。だが、1人当たりでは米国がトップ、日本がそれに次ぐ世界第2位の規模だ。

OECDによると、プラごみのうちリサイクルに回っているのは全体の15％程度にとどまり、投棄や埋め立てで環境中にたまる量は50年には約120億トンに達すると予測される。このままでは、プラスチックごみによる海洋汚染が今後も深刻化するのは確実だ。

日本が抱える問題も大きい。環境省によると、プラスチックごみの発生量は年間910万～920万トン。01年の1016万トンをピークに減少傾向にあるが、80年の3倍近い量だ。

6月、カナダでの先進7カ国首脳会議で、米国とともに海のプラスチックごみ削減の数値目標を盛り込んだ「海洋プラスチック憲章」への署名を拒否した背景には、使い捨てプラスチックの排出削減が思うように進まないことがある。

環境省のある担当者は「24時間営業のコンビニエンスストアと多数の自動販売機という日本独特のライフスタイルが使い捨てプラスチック問題の解決を困難にしている」と指摘する。

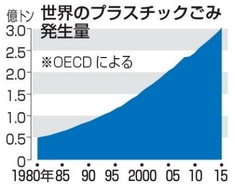
業界団体によると、飲料品ではペットボトルの生産量は缶や紙容器に比べて圧倒的に多く、近年、急増傾向にある。製品のリサイクルに取り組むPETボトルリサイクル推進協議会によると、04年度には148億本だった出荷本数は16年度には227億本に達した。

一方で、地方自治体や業者による回収率は88・9％で、2年連続で低下した。

プラスチック問題に詳しい高田秀重・東京農工大教授は「25億本のペットボトルが未回収になっている計算で、その一部が海に出ただけでも深刻な汚染を招く。『日本のペットボトルはよくリサイクルされている』とはとても言えない」と指摘する。

環境省は現在、専門家による委員会で、プラスチックごみ対策を進めるための「プラスチック資源循環戦略」の策定を進めているが、この中でもペットボトルの環境への流出量をどう減らすかが、焦点の一つになりそうだ。

インドネシアの海岸にたまったプラスチックごみ ＝4月（ロイター＝共同）



国際条約が必要に

高村ゆかり・東京大教授

使い捨てプラスチックが原因の海ごみ問題は深刻化しており、発生源は先進国だけでなく発展途上国にも広がっている。国連などは1990年代から、陸地から海に出る汚染物質を減らすための国際対策を各国政府の自主的な取り組みに基づく形で進めてきたが、これには限界があることが明らかになってきた。

問題の本質的な解決のためには、現在の使い捨てのプラスチックに依存した生産と消費のパターンを根本から見直す必要がある。そのためには各国で使用量を減らすとともに途上国の問題対処能力を先進国の支援によって強化することが不可欠だ。これらを進めるには、海のプラごみ対策推進のための条約など、新たな国際的な枠組みが必要だろう。

国連環境計画は既に専門家による作業部会を作って国際条約を念頭に置いた議論を進めており、来年3月にナイロビで開く第4回国連環境総会での議題とされる可能性もある。日本政府もアジアを中心にした途上国支援を含め、国際的な取り組みの強化に積極的に貢献するべきだ。

日本、輸出と焼却に依存

日本では、プラスチックごみの分別回収とリサイクルが進んでいるというのが一般的な理解だが、データからは意外なものが見えてくる。

産業環境管理協会のデータブックによると、2015年の国内のプラスチックごみ排出量は915万トン。このうちプラスチック原料などとして再利用されたものは205万トンで22％にすぎない。しかも、そのうちの161万トンが中国や香港などに輸出された。

ところが、中国が昨年末でプラごみの輸入を禁止する政策に転換、多くのごみが行き場をなくした。代わりにベトナムやインドネシアなど東南アジア諸国への輸出が増えているが、東南アジア諸国にも禁輸の動きがある。

一方、国内で回収された後に焼却されたプラスチックごみの量は、焼却時に出る熱を回収したり、発電に使ったりするものを含めて600万トンを超える。ほぼ3分の1が燃やされている計算だ。

だが、今世紀後半の「脱炭素」を掲げるパリ協定の採択後、二酸化炭素の発生源となるごみの焼却には厳しい目が向けられる。

焼却と輸出に依存する日本のプラスチックごみ処理政策は大きな曲がり角に立っている。

処理政策は曲がり角

異臭の中、ごみあさる母

アフリカ・ルポ

ごみの山の中から売れそうなプラスチック製品を集めるネリア・ロティさん ＝8月、ザンビア・カブウェ（共同）

プラスチックの飲料容器やシート、大小の金属製品、腐った食品、ガラス瓶や空き缶。ありとあらゆる種類のごみの山がどこまでも続く。ここは、アフリカ・ザンビアの都市、カブウェのごみの集積地。中心部を抜け、小高い丘に車で乗り入れた途端、鼻を突く異臭が車内に流れ込み、あちこちから立ち上る白煙が視野を曇らせた。

ごう音とともにやってくる大きなトラック。荷台に乗った5人の作業員がスコップを手に、ごみを次々と山の中に投げ捨てる。

「契約会社のトラック5台のほかトレーラーが1台あって、毎日、町からごみを運んでくる。分別も何もしていないので量は増える一方だ。中でも使い捨てプラスチックは始末が悪い」と語る市の担当者、エバンス・チンザさん42の表情はさえない。「容積を減らすために火を付けなければならないのが実情だ」

新しいごみが運ばれてきたのを見て、集まってくる人々がいた。2人の女性と数人の子ども。ごみの山の中から売れる物を掘り出して売る「スカベンジャー」と呼ばれる人々だ。女性の1人の背中では、そまつな布にくるまれた乳飲み子がぼんやりと空を見上げていた。

ごみの中から透明なプラスチックシートなどを抜き出し、慣れた手つきで袋の中に詰めていたネリア・ロティさんは45歳。6人の子持ちで週3回、ここにやってくる。

「この仕事を始めて7年以上になる。集めたプラスチックは1キロ1クワチャ（約10円）で首都の業者が買ってくれる。食べ物を買うお金がほしいからね」と屈託なく笑う。子どもの1人が近くにあったペットボトルを拾い、残っていたジュースを飲み始めたが、気にする様子もない。

乳飲み子を背負った女性は36歳のハリエティ・フィリと名乗った。「5年前にこの仕事を始めるとき、業者は作業衣や履物など有害なごみから身を守るものをくれると言ったのにいまだに何もくれない。子どもを連れて来なければならないし、体に悪いんじゃないかと気にかかる」と不安を口にする。それでも貴重な収入源だ。

「増え続けるごみの処理費用は行政にとっても大きな負担だ。人々に分別を求めるのは容易じゃないし、分別したところで再利用の道も限られる。焼却炉を建てる金もない。いつまでもこんなことを続けてはいられないとは分かっているのだが」―。ごみを満載してやってきた新たなトラックを見ながらチンザさんがつぶやく。

多くの人が貧困にあえぐ国にも広がる使い捨てのライフスタイルと大量のプラスチックごみ。それは現代社会が抱える大きな矛盾の象徴のように見えた。

広がり続ける集積地

© 静岡新聞社 無断複製転載を禁じます